

〈資料〉

臨地実習施設の実習調整担当者が考える 地域コーディネーターの現状と課題

前田陽子¹・前田隆子¹・田中響¹・矢倉紀子¹・
出石幸子¹・荒井優²・高田美子²

Yoko MAETA¹, Takako MAEDA¹, Hibiki TANAKA¹, Noriko YAKURA¹, Sachiko IZUISHI¹,
Masaru ARAI², Yoshiko TAKATA² :

The Role and Function of the Local Training Coordinator Considered
by the Training Coordinator of the Clinical Training Facility

平成28・29年度の2年間に、A看護大学の実習生を受け入れた臨地実習施設の実習調整担当者7名に、半構成的面接を行い質的帰納的方法で分析した結果、155個のコードより「役割の具体」「地域コーディネーターへの希望と課題」「将来の見通し」の3個のコアカテゴリーが抽出された。本調査により、臨地実習施設の実習調整担当者が考える地域コーディネーターの現状、および、今後の課題が導き出された。

キーワード：臨地実習 調整担当者 コーディネーター 課題

はじめに

日本で進展する急速な高齢化に向けて、看護職の人材確保が急務であり、とくに病院などの医療機関に対して看護師の処遇の改善を求め、看護師の専門知識と技能を向上させることを目的に、1992(平成4)年6月「看護師等の人材確保の促進に関する法律」¹⁾が公布された。この法施行以降、1991(平成3)年には11大学しかなかった看護大学は1993(平成5)年には21大学と倍増し、その10年後の2003(平成15)年には104大学に増加、A看護大学が開学した2015(平成27)年には241大学、2018(平成30)年5月には263校となり、入学定員は23600名を超えるに至った²⁻³⁾。このような看護系大学急増

の状況にあって、その半数以上の大学は、附属病院や基幹病院を持たない。これについては、2002(平成14)年に文部科学省が「看護教育のあり方に関する検討会」の報告書「大学における看護実践能力の育成に向けて」⁴⁾の中で「大学固有の附属施設等で行うことが可能な看護学の臨地実習は、全体のごく一部に過ぎない」と現状の問題点を指摘した上で、「大学近郊の広範囲の医療施設・保健・福祉施設の協力により成り立つものであり、この側面は地域社会のニーズを受け止めて発展していく看護学教育独自の姿である」と問題解決の方向性を示している。しかしながら、近年の少子高齢化や医療の高度化・複雑化に対応する医療機関の機能分化等を含む再編も関連して、新設校に限らず実習施設の確保に困難を抱える大学は少なくないのが現状であり、問題は解決していない。

A看護大学も類にもれず、附属病院や基幹病院を持たず、その臨地実習施設数は、病院29カ所、

1 鳥取看護大学 看護学部看護学科

2 元鳥取看護大学 看護学部看護学科

クリニックや保健所、老人福祉施設、地域包括支援センター、訪問看護センター、保育所等も含めれば、実に県内約150カ所にも上る桁外れの多さであり、教員が負担し得る限界をはるかに超えていた。このような臨地実習運営の困難さから生まれたのが、「地域コーディネーター」システムであった。

A看護大学では、看護管理経験が5年以上で保健医療福祉の領域での社会活動実績があり、地域を熟知した人材を「地域コーディネーター」と称し、①各地域での実習日・実習場所・受け入れ人数などの調整を教員と共にを行う。②臨地の日常業務と学生への指導が連動するよう教員と検討し、実習地の実習指導責任者と協議する。③指導教員の配置の調整を領域の責任者で行う。④実習先の状況の情報を教員に提供する。⑤実習環境の整備及び調整を行う。⑥臨地実習教育会議と臨地実習調整会議を開催するための調整・準備を行う。⑦その他の諸課題が生じた場合に、実習先と教員との調整を行う。という7つの役割を果たすことを目的に設置した。

地域コーディネーターのシステムはA看護大学独自の取り組みであり、導入されて日も浅く、また、看護領域での前例も見当たらない。

本研究チームは、過去2年の間に地域コーディネーターの思い、やりがい、抱負などから課題を明らかにすることや、大学教員が思う地域コーディネーターの役割と機能に関して研究を行った。そして、今回の研究の目的は、地域コーディネーターと実習調整を行った臨地実習施設の実習調整担当者が考える、地域コーディネーターの役割と機能を明らかにし、A看護大学における地域コーディネーターのシステム構築の基礎資料を得ることである。

1. 本研究での用語の定義

(1) 地域コーディネーター

本研究で用いる「地域コーディネーター」とは、「A看護大学に所属し、A看護大学の臨地実習施設の臨地実習調整者と物事を調整する人」とする。

(2) 臨地実習調整者

本研究で用いる「臨地実習調整者」とは、「A看護大学の実習生を受け入れた臨地実習施設に所属し、地域コーディネーターと実習調整を行った人」とする。

(3) 役割

本研究で用いる「役割」とは、「割り当てられた役目」とする。

(4) 機能

本研究で用いる「機能」とは、「全体を構成する個々の部分が果たしている固有の役割、また、そうした働きをなすこと」とする。

2. 研究方法

(1) 研究デザイン

半構成的面接法による質的記述研究。

(2) 研究対象

平成28・29年度の2年間に、A看護大学の複数の領域実習で、20名以上の実習生を受け入れた臨地実習施設の中で、地域コーディネーターと実習調整を行った臨地実習調整者のうち、看護管理者および本人が研究協力の依頼に書面で同意し、研究者が設定した期限（同意書返送締め切り日から2か月の間）に面接が可能であった臨地実習調整者を研究対象とした。

(3) 調査期間

平成30年5月中旬～平成30年7月中旬。

(4) データ収集と分析方法

研究者は研究対象者同士が面接を実施する施設内で対面しないように日程を調整し、研究対象者が所属する施設内の落ち着いた環境の個室で、研究チームの面接によるデータ収集担当者（以下、面接担当

者とする)が、研究対象者と1対1で個別に面接を実施した。また、データの信頼性・妥当性を確保するため、分析は必ず共同研究者3名以上で協議しながら進めた。

(5) 倫理的配慮

研究者は研究対象者に対し、面接前に本研究の意義・目的・方法および期間、研究責任者及び共同研究者の氏名、および、本研究への参加は自由意思に基づくものであること、研究への参加・不参加によって何ら利益・不利益を生じないことや、研究対象者は不利益を受けることなく同意を撤回することができるが、データをコード化した時点で撤回ができなくなることを説明した。また、得られたデータは5年間保存し、研究対象者の希望により、個人情報保護や本研究の実施に支障がない範囲で、本研究計画及び本研究の方法についての資料やデータを入手又は閲覧することができること、研究対象者を特定できないようにした上で、本研究の成果が公表される予定であることを文書と口頭で説明し、書面にて同意を得た。

研究対象者への影響(身体的・精神的負担、及びその他のリスク)に対する配慮として、研究による身体的・精神的苦痛が生じた場合は、その対象者に対するインタビューなどを延期あるいは中断するなど速やかに対処し、必要に応じて専門機関を紹介する等の対処を行う事や、研究が研究対象者にとって過度の負担になっていると判断した場合は、研究者側から丁寧に中断を申し入れる事等を説明した。

なお、本研究は鳥取看護大学・鳥取短期大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号2017-11)を得て実施した。

3. 結果

(1) 研究対象者とインタビュー所要時間

対象者は全てが女性で、職位は看護部長4名、副看護部長1名、教育担当師長2名の合計7名であっ

た。インタビュー所要時間は最長29分55秒、最短15分51秒、平均21分12秒であった。

(2) 抽出されたカテゴリー

臨地実習指導者へのインタビューの逐語録を、言葉の意味内容に従ってコード化した結果、159個のコード、27個のサブカテゴリー、10個のカテゴリーから3個のコアカテゴリー【役割の具体】【地域コーディネーターの希望と課題】【将来の見通し】が抽出された(表1)。以下、コアカテゴリーは【 】, カテゴリーは[], サブカテゴリーは< >, コードは「 」で示す。

(3) 臨地実習施設の実習調整担当者が考える地域コーディネーターの役割と機能(表1)

臨地実習施設の実習調整担当者が考える地域コーディネーターの役割と機能は【役割の具体】【地域コーディネーターへの希望と課題】【将来の見通し】の、3個のコアカテゴリーで構成されていた。

1) 【役割の具体】

このコアカテゴリーは、[実習計画のための調整][実習の学びのための調整][実習の水準備保のための役割][施設のモチベーション向上][コーディネーターと教員との関係性]の、5個のカテゴリーで構成されていた。

① [実習計画のための調整]は、「実習の調整を具体的に、いつ何人の学生さんが来られるという調整をされる」や「人数的に難しいところに関してはお願いもし、調整もしてもらっている」などの〈実習時期や受け入れ学生数の調整〉、「前もって自分達の計画をして、専修学校に調整に行かれて、ここに来られる」「病院と看護大学、専門学校の3者が困らないようにコーディネーターしてもらっています」などの〈他校との調整〉、「前もって約束した状況と、病床運営が変わった時など、再度打ち合わせができた方がいい」などの〈現場の状況に応じた再調整〉の、3個のサブカテゴリーで構成されていた。

表1 臨地実習施設の実習調整者が考える地域コーディネーターの役割と機能

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー (コード数)
役割の具体	実習計画のための調整	実習時期や受け入れ学生数の調整 (13)
		他校との調整 (8)
		現場の状況に応じた再調整 (3)
	実習の学びのための調整	実習環境の調整 (2)
		充実した実習のための調整 (8)
		大学と臨地実習施設とのすり合わせ (11)
	実習の水準確保のための役割	他施設の情報提供 (2)
		会議の役割 (5)
	施設のモチベーション向上	地元出身の強み (8)
		対面会話による心理的効果 (8)
		臨地実習施設に対するフィードバック (7)
	コーディネーターと教員の関係性	情報の共有 (5)
		実習に関わる判断 (6)
わからない (2)		
地域コーディネーターへの希望と課題	コーディネーターに対する希望	役割の不明確さ (3)
		他施設の情報提供 (5)
		施設訪問の日程調整 (6)
		実習施設の認識を確認 (4)
	難しさ	調整役割の困難さ (11)
		情報伝達の不確実さ (6)
		判断の曖昧さ (6)
		付き合い方がわからない (2)
将来の見通し	実習施設側の経年変化	コーディネーターを介さない調整 (10)
		実習イメージの確立 (3)
		実習受け入れ体制の変化 (3)
	コーディネーターの必要要件	コーディネーターの必要要件 (3)
地域コーディネーター役割に対する評価	地域コーディネーター役割に対する評価 (9)	

② [実習の学びのための調整] は、「スムーズに実習ができる環境を整える役割」「環境も整えられるし、学生さんはこれでいけるのかということも、総合的にみて調整される役目」などの〈実習環境の整備〉、「学生さんが目的・目標とする実習がスムーズに行くように調整される方」「学生がより質の高い実習ができるための状況を整える」

などの〈充実した実習のための調整〉、「大学と病院の調整役」「病院の方針と各実習施設の間で、実習をうまくできるための橋渡しあるいは連絡係」などの〈大学と臨地実習施設とのすり合わせ〉の、3個のサブカテゴリーで構成されていた。

③ [実習の水準確保のための役割] は、「コーディネーターさんが動いておられるからこそ、施設側

は他施設の情報も得られている」などの〈他施設の
情報提供〉、「コーディネーターさんは調整会議
もされている」「大学側のこういう実習をしたい
ということは、調整会議でも教えていただいでい
ます」などの〈会議の役割〉の、2個のサブカテ
ゴリーで構成されていた。

④ [施設のモチベーション向上] は、「顔見知りと
いうようなことでは、すごくコンタクトを取りや
すい」「この地域の病院を知っておられる方たち
なので、その辺の事情を知っておられる」などの
〈地元出身の強み〉、「顔と顔が見える関係」「大
学側はこういうふうに感じている、病院側はこう
いうふうに感じているということは、本当に顔を
見て話すから気づきがあったり、お互いの思い込
みをそこで調整できる」などの〈対面会話による
心理的効果〉、「大学の先生方の意見をちょっと
フィードバックしてもらったりすることがある
と、次のモチベーションに繋がるという付加価値
がついてくと思う」「コーディネーターさんと
会って、その施設に対する良いところを直接伝え
ていただくと、実習を受けようというモチベー
ションは上がります」などの〈臨地実習施設に対
するフィードバック〉の、3個のサブカテゴリー
で構成されていた。

⑤ [コーディネーターと教員の関係性] は、「実習
施設の実習体制や人数受け入れキャパを大学のほ
うに持ちかえて、先生方と話を調整されて
いる」「教員に伝えたことは大学に持ち帰って
いただいで、コーディネーターさんが一緒に入っ
て検討されたり返事をいただいたりしている」など
の〈情報の共有〉、「他者評価をコーディネーター
さんがされて、それを大学の先生方が共通認識さ
れる」「コーディネーターさんが評価された結果
が、学生さんの配点数なのかと思います」などの
〈実習に関わる判断〉、「コーディネーターと教員
との連携というのは、私はよくわからないとい
うのが正直なところ」など〈わからない〉の、3個
のサブカテゴリーで構成されていた。

2) 【地域コーディネーターへの希望と課題】

このコアカテゴリーは、[コーディネーターに対
する希望]と[難しさ]の、2個のカテゴリーで構
成されていた。

① [コーディネーターに対する希望]は、「コーデ
ィネーターの人の役割が何で、例えばこういうこ
とはコーディネーターを通してくださいとか、そ
ういうものって元々なかったと思う」「こういう
ことはコーディネーターを通してもらおうと、も
っとスムーズにいきますよとか、そういう逆提案
もなかった」などの〈役割の不明確さ〉、「例え
ば、こういうふうな工夫をしておられますよと
いうようなことも、伝えるににくい部分はある
かも知れないけど、気づきとかをいただけると
良い」「個別にはここはこうですと教えてい
ただかなくてもいいので、他施設さんではこ
ういうふうな工夫をしておられるところはあ
りますよと教えていただきたい」などの〈他
施設の情報提供〉、「訪問される時は、結構
ギリギリですよねというのがある」「看護大
学が入る時期が、他の2つの学校と同時期に
なるので、こっちも整理しなくてはいけない
と思っても、大学からの実習計画がいつまで
待っても来ない」「コーディネーターさんの
訪問日は3日間ぐらいの中から選ばせてもら
ったら助かる」などの〈施設訪問の日程調整〉
、「(実習計画が)このように変わりましたと
かいう最後のフィードバックがなかったのは
残念だった」「実際との相違がある場合に
は教えてほしい」などの〈実習施設の認識を
確認〉の、4個のサブカテゴリーで構成され
ていた。

② [難しさ]は、「去年の計画と実施にずれが
生じた場合の修正を、どこの段階ですか」「診
療報酬との絡みで、看護師配置が変化したり
するが、実習計画はあらかじめ1年先のこ
とを考えながら組む」などの〈調整役割の
困難さ〉、「どこかで情報がストップして
いて、最後は伝わらないとか、そういうこ
とってよくある」「事前の計画なので、そ
の1年前のこととか、2年前のことの記憶も
薄

れていくし、実際に人数がどうなるかというところ」などの〈情報伝達の不確実さ〉、「大学の要件と現場とのすり合わせは、地域コーディネーターの方には、判断が難しいと思います」「病院側がこういうふうを考えるから受けられないという事情と、大学側の受け入れて欲しいという事情を、コーディネーターの人が判断するという事はたぶんどできないのじゃないか」などの〈判断の曖昧さ〉、「顔は知っているけど、付き合い方がよくわからない」「直接お会いしてという事にはなかなかならない」などの〈付き合い方がわからない〉の、4個のサブカテゴリーで構成されていた。

3) 【将来の見通し】

このコアカテゴリーは、[実習施設側の経年変化][コーディネーターの必要要件][地域コーディネーター役割に対する評価]の、3個のカテゴリーで構成されていた。

- ① [実習施設側の経年変化] は、「実際に実習が始まってしまうと、教員と私たちのやり取りになってくるので、繋がっているようで全部というところはなかなか繋がっているようで薄いのかなというイメージはある」「実習が始まったら担当の教員に相談する」などの〈コーディネーターを介さない調整〉、「今、こうやって始まって、2・3・4年生が実習をするようになると実習全体のイメージもわく」「初めの日にちが決まるまでの期間は、何回かやり取りをさせてもらった」など〈実習イメージの確立〉、「大学の実習施設になってから、委員会を立ち上げて実習というものを正面から捉えて問題解決に向かって考えている」「当病院は、人を育てるという事に関して、基本的なことが欠けていたと思う」などの〈実習受け入れ体制の変化〉の、3個のサブカテゴリーで構成されていた。
- ② [コーディネーターの必要要件] は、「仮の話と実際とを連動させるタイミングがきちんとできる方が良い」などの〈コーディネーターの必要要件〉の1個のサブカテゴリーであった。
- ③ [地域コーディネーター役割に対する評価] は、

「施設側のことも情報収集されていると思います」「今のところは、特に問題なく調整していただいていると思っている」などの〈地域コーディネーター役割に対する評価〉の1個のサブカテゴリーであった。

4. 考察

(1) 役割の具体

学生が対象者に看護行為を行い、その過程で既習の知識・技術・態度の統合を図りつつ、看護の方法について習得する臨地実習は看護職者を目指す学生にとって不可欠である⁴⁾が、臨地で実地に体験させることを通して実践能力の基礎を培うことは、学生であるがゆえに制約が伴うため、その実施には、習熟した看護職者の指導が不可欠である。しかし、実習施設にとって実習生の受け入れは、日常業務の運営の安定を乱すという危惧や、通常業務の方法が批判の対象となってしまうという不安を伴う⁴⁾。さらに、看護職の定数配置には、実習指導が考慮されておらず、A看護大学が過去に実施した調査でも、A看護大学の実習施設の約94%が兼任指導体制⁵⁾という結果が得られ、実習生の受け入れが臨地実習指導者の多忙を増幅させる要因となっていることが示唆されている。臨地実習調整者は、地域コーディネーターがこのような状況下でも、病院の規模や病棟の実習生受け入れ許容人数を想定した上で実習計画を立案し、病院と看護大学、専修学校の3者が困らないように〈他校との調整〉や〈実習時期や受け入れ学生数の調整〉など、同施設で実習を行う複数の学校間で連絡・調整機能を果たしていると捉えていた。このことから地域コーディネーターは、設置目的の「①各地域で実習日・実習場所・受け入れ人数などの調整を教員と共に行う」役割を果たしていることがわかった。

実習調整は実習1年前から行われるため、診療報酬改定などの諸事情に伴い、再調整が必要になる場合もある。〈現場の状況に応じた再調整〉が必要に

なった場合の地域コーディネーターの対処については、「最終的に看護部長である私の意見は聞いてもらえるということではできているので、コーディネーターさんとの連携はできているのかなと思います」と好評価を得る一方で、「前もって約束した状況と、病床運営が変わった時など、再度打ち合わせができたほうがいい」という臨地実習調整者からの現状改善のための提言もあった。再調整する場合、地域コーディネーターは設置目的「⑦その他の諸課題が生じた場合に、実習先と教員との調整を行う」に基づき役割を遂行することが必要である。そのためには、診療報酬の改定や国の方針などに関してもアンテナを高くし、実習施設側からの実習再調整の要望を予測し、積極的に地域コーディネーターから連絡するなどの工夫が必要と考える。

臨地実習調整者は地域コーディネーターが「実習の学びのための調整」として、〈実習環境の整備〉〈充実した実習のための調整〉〈大学と臨地実習施設とのすり合わせ〉をしていると捉えていた。これはA看護大学が地域コーディネーターに対して期待した役割「⑤実習環境の整備及び調整を行う」に該当する。学生にとって実習は、看護サービスを受ける対象者と相対することで、援助的人間関係を形成する能力や、専門職者としての役割や責務を果たす能力も身につけていく学修過程として不可欠である⁴⁾。しかし、看護学生にとって臨地実習は、ライセンスを持たない自らが看護行為を行う戸惑いや不安、現実の場面のみが作り出す看護の喜びや難しさ、新たな自己の発見、自己ができること・できない事の自覚や、緊張やストレスを伴う経験でもある。臨地実習調整者は地域コーディネーターが、実習生が「スムーズに実習ができる環境を整える役割」だけでなく、「学生さんはこれでいけるのかということも総合的に観て調整」していると捉えていた。この実習環境整備の視点は実習生の心身の健康や実習での良いパフォーマンスを生み出すためにも必要である。

〈充実した実習のための調整〉については、地域コーディネーターは「多くの施設で同レベルの実習

ができるように調整していく役目」や「学生が目的・目標とする実習がスムーズに行くように調整」、「学生がより質の高い実習ができるように調整していく役割」を果たすために、「実習施設間の調整をして、よりその施設にあった実習を各施設で受けていただく」等、「実習に適した病院かの判断に大きく関わっている」と捉えられていた。また、〈大学と臨地実習施設とのすり合わせ〉については、臨地実習調整者はコーディネーターが「病院の方針と各実習施設の間で、実習をうまくできるための橋渡しあるいは連絡係」として、「大学の意見、病院の意見をお互いうまくまとめて、いい結果を得て、学生が実習できるための調整」をし、臨地実習調整者が「こっこの思いや意見もちゃんと大学側に伝えてもらっていて、調整してもらっている」と思えるような存在で、「実習場と看護大学の先生とのマネジメントというか、そこを繋げるものだということを意識されている」人達であり、「連携をスムーズにするための潤滑油みたいな役目」であると捉えられていた。

臨地実習調整者は、地域コーディネーターの「コーディネーターさんが動いておられるからこそ、施設側はそういう情報も得られて」おり、「他の施設の情報をもろうことは、封書でやり取りしている大学では、まず無理」であるなどの〈対面による心理的効果〉を臨地実習施設にとってのプラス効果として評価していた。また、実習に関わる〈会議の役割〉については、「うちだけがこういうことをしているのじゃないかとか、他だともっと違うんじゃないかなという情報を言ってもよいのか迷う事もある」が、「周りの施設でどういう事をされているとか、学生の様子も伺うことができる」と会議自体が有用だと考え、地域コーディネーターはその場を提供してくれる役割の人と捉えていた。このことから、A看護大学が地域コーディネーターに期待した「⑥臨地実習教育会議と臨地実習調整会議を開催するための調整・準備を行う」役割を果たしていることがわかった。

臨地実習調整者は地域コーディネーターが〈地元出身の強み〉を活かし、〈対面会話による心理的効果〉

も考えた調整方法を実践しており、〈臨地実習施設に対するフィードバック〉を行うなどして、〔施設のモチベーション向上〕に寄与していると捉えていた。これは A 看護大学が地域コーディネーターに対して期待した役割には含まれていないが、臨地実習施設に A 看護大学の実習目的や目標の理解を深めてもらい、臨地実習施設とのスムーズな調整や実習指導の質担保や質向上に向けて必要かつ意義深いことだと考える。また、地域コーディネーターは〈地元出身の強み〉を活かし、臨地実習調整者に対し、「顔見知りというようなことでは、すごくコンタクトを取りやすい」「この地域の病院を知っておられる方たちなので、その辺の事情を知っておられる」という印象を与え、「地元の方が動かれるというのは、繋ぐという部分ではよかった」「大学側の窓口としては、地元におられる方というところでは、良い方法だったんじゃないかと思います」という評価を得ていた。また、地域コーディネーターは臨地実習調整者と、文字通り「顔と顔が見える関係」を築くことで、臨地実習調整者の「他の学校は封書で実習生は何人ですみたいな感じで来る。それだけだと学生さんに対する思いが全然違う」「対面して話をして自分自身が非常に心を砕いて準備したという気持ちと、それから紙一枚で何人というのとでは思い入れに多少の差は出るという事は実際にある」という心理面にまで影響を与え、地域コーディネーターが行う対面での〈臨地実習施設に対するフィードバック〉は、「コーディネーターさんと会って、その施設に対する良いところを直接伝えていただくと、実習を受けようというモチベーションは上がります」「コーディネーターさんに関わることで、もっと頑張ろうとか、もっとやろうとかという思いに繋がっているのは間違いない」が示すように、臨地実習施設側の意欲に影響を与えていることがわかった。

臨地実習調整者は〔コーディネーターと教員との関係性〕については、「実習人数のことで、病院と大学のやり取りがあった時にも、大学の教員が間に入られた」や「実習施設の実習体制や人数受け入れ

キャパを大学のほうに持ちかえって、先生方と話をして調整されている」と捉えており、大学の教員と地域コーディネーターは独自の役割を持ちつつ連携しており、「より適した実習施設と学生の配分をされる上で、情報を持ち帰られるコーディネーターさんの役割は非常に大きい」と捉えていた。しかし、〈実習に関わる判断〉に関しては、「他者評価をコーディネーターさんがされて、それを大学の先生方が共通認識される」「コーディネーターさんが評価された結果が、学生さんの配分数なのかと思います」「実習に来られている先生方、大学の実習計画担当の先生方とかが意見を合わせられて、施設毎の学生数を決めておられると思っている」「コーディネーターさんの実習施設の見解を教員の方に伝えられて、その情報を基に学生の人数を配分しておられると現場は思っている」と、地域コーディネーターが〈実習に関わる判断〉に関与していると考えている人と、「コーディネーターの方が、どういう形で大学の先生と、どこでどう調整をしておられるのかっていうのがわからない」という両方の意見が聞かれた。このことから、地域コーディネーターの役割と教員の役割を明確し、臨地実習施設に周知することが必要であると考ええる。

(2) 地域コーディネーターへの希望と課題

臨地実習調整者は〔地域コーディネーターに対する希望〕として、「予定と現実が違った時に、どの段階で修正をかけるかが難しい」という再調整の申し入れ時期判断の難しさや、「コーディネーターの役割が何で、例えばこういうことはコーディネーターをとおしてください」など、地域コーディネーターの〈役割の不明確さ〉があると指摘があった。また、〈他施設の情報提供〉については、「例えば、こういうふうに工夫をしておられますよというようなことも、伝えにくい部分はあるかも知れないけど、気付きとかをいただくと良い」「個別にはここはこうですと教えていただかなくてもいいので、他施設さんではこういうふうな工夫をしておられるとこ

ろはありますよと教えていただきたい」など、他施設の情報を提供する上での限界に理解を示した上で、「いいところも悪いところも、いろんな意味で多少ともフィードバックをしていただいたりすれば、それを次の実習に活かしていきたい」「工夫しておられる実習施設の情報があつたら、うちの実習環境として取り入れて、さらに改善したりすることもできるかなと思ったりもします」と、地域コーディネーターからの他施設の情報を参考に、自施設も改善すべきところは改善したいという思いや考えが述べられており、地域コーディネーターが積極的に実習施設の環境改善のための情報提供やアドバイスを行うことで、A看護大学が地域コーディネーターに期待する役割の「⑤実習環境の整備及び調整を行う」を間接的に果たしていることが示唆された。

〈施設訪問の日程調整〉では、「看護大学が（実習に）入る時期が、他の2つの学校と同時期になるので、こっちも整理しなくてはいけないと思っていても、大学からの実習計画がいつまで待っても来ない」などの日程調整に関する意見と、「訪問される時は、結構ギリギリです」「コーディネーターさんの訪問日は3日間ぐらいの中から選ばせてもらったら助かる」など、施設を訪問する際には施設側の状況も考慮し、余裕のある訪問日程を調整してほしいという要望があった。また〈実習施設の認識を確認〉については、「（実習計画が）このように変わりましたとかいう、最後のフィードバックがなかったのは残念」「実際との相違がある場合には教えてほしいかなあ」など、実習調整責任を果たしてほしいという要望や、「実習を組む中でコーディネーターの人は、この近辺の病院の実習の時期がどこに配置されるのかをちゃんと周知してから来ていただいた方が、話が割とスムーズかなと思いました」という、効率の良い調整のためには他の学校の情報収集も重要であるとの提言があった。この意見や提言は、地域コーディネーターが役割遂行のために自らの行動を振り返り、対策を講じるための貴重な資料になると考える。臨地実習調整者は「難しさ」として、「病院の機

能がかなり違う中で、はじめて看護大学の実習を受けらるっていう、その間に立つというところでは、たぶん病院側の反応も様々だったと思うんですよ」という実習受け入れ経験に差がある複数の病院を開拓する上での苦労や、「いろいろな施設の向こう側とこちら側の条件と、大学の条件を合わせるのは、とても大変じゃないかと思います」という大学と臨地が示す条件下で調整をする困難さ、「他の学校とのドッキング」というハプニングなどを〈調整役割の困難さ〉と捉え、実習調整を行う上での地域コーディネーターの苦労には理解を示し同情的なコメントが多かった。

〈情報伝達の不確実さ〉としては、「どこかで情報がストップしていて、最後は伝わらないとか、そういうことってよくある」「この人数でよろしいかって、契約の確認はどうもくるとみたいですが、その時によく見ると人数が違っていると、そういうことがよくあるようなので」という情報伝達不備の具体的なケースが示された。情報伝達が不確実な状況は臨地の日常業務と学生への指導の連動を妨げる要因となるため、これについては、大学側と施設側の双方で原因を探求し、確実な情報伝達のための方策を講じることが重要である。また、「事前の計画なので、1年前とか2年前の記憶も薄れていく」という時間経過により生じる〈情報伝達の不確実さ〉については、話し合った内容は記録に残し双方が保管するなどの方策を講じることが必要である。

〈判断の曖昧さ〉については、「大学の要件と現場のすり合わせは、地域コーディネーターの方には、判断が難しいと思う」「病院側の受け入れられない事情と、大学の受け入れてほしいという事情を、コーディネーターが判断するのはたぶんできないんじゃないか」など、「判断」については地域コーディネーターでは果たせていないと捉えられていた。A看護大学が地域コーディネーターを設置した際のマニュアルでは、地域コーディネーターは「④実習先の状況の情報を教員に提供する」「⑤実習環境の整備及び調整を行う」「⑥臨地実習教育会議と臨地実

習調整会議を開催するための調整・準備を行う」は単独でも行えるが、「①各地域での実習日・実習場所・受け入れ人数などの調整を教員と共に行う」「③指導教員の配置の調整を領域の責任者と行う」は教員との協議を経て最終判断が可能であり、「②臨地の日常業務と学生への指導が連動するよう教員と検討し、実習地の実習指導責任者と協議する」は施設の実習責任者との協議が必要であるとされ、地域コーディネーターに判断は委ねられていない。A看護大学が地域コーディネーターを設置して数年が経過している。地域コーディネーターに判断の権限を付与するか否かも含め、地域コーディネーターの実績を整理・評価し役割や機能の検討の必要性が示唆された。

〈付き合い方がわからない〉については、〈地元出身の強み〉を活用できる相手には「顔見知りというようなことでは、すごくコンタクトを取りやすい」と良い評価をしてくれる臨地実習調整者もいるが、中には「顔は知っているけど、付き合い方がよくわからん」ことを〈難しい〉と捉えている人もいた。この問題が実習調整に悪影響を及ぼしているのであれば、A看護大学で開催される臨地実習教育会議や臨地実習調整会議の機会を活用し、心理的距離を縮めるなども必要である。

(3) 将来の見通し

臨地実習調整者は、地域コーディネーターと関わり始めた頃と現在を比較し、[実習施設側の経年変化]として〈コーディネーターを介さない調整〉もあることや、臨地で実習をする学年の増加に伴い〈実習イメージも確立〉したことや、〈実習受け入れ体制の変化〉を挙げていた。

「実習が始まったら担当の教員に相談する」「実習が始まるとコーディネーターを通して何か話をするとかは、ほぼない」「実習そのものに関しては、担当の先生との話じゃないと無理なところがある」「実際に実習が始まってしまうと、教員と私たちのやり取りになってくるので、繋がっているようで薄い」

というように、実習で教員の接触の機会が増加すると、臨地実習調整者と教員との相談が主になり、〈地域コーディネーターを介さない調整〉が増え、地域コーディネーターとの関係性が希薄になると捉えていた。

〈実習受け入れ体制の変化〉については、「病院側も実習検討委員会を立ち上げて、少しでも良い環境で大学の目的と学生さんの学習に対するニーズに合致した実習ができる施設となれるように頑張っている」や「大学の実習施設になってから、委員会を立ち上げて実習というものを正面から捉えて問題解決に向かって考えている」など大学の実習の機会を前向きに捉え、委員会を発足するなどして、施設・看護部全体で実習を考え、サポートできる体制に向けて変化し始めていることがわかった。

臨地実習調整者は、地域コーディネーターは「実習現場を知らないと務まらないし、学校の事情も知らないといけない」そして、「いろんな条件を病院側も出させてもらおうし、大学側も学生のことを思われる、その調整が大事な役割だと思う」と〈地域コーディネーターの必要要件〉を述べていた。

〈地域コーディネーターの役割に対する評価〉は、「今のA看護大学の実習形態だと、今のコーディネーターの役割は必要かつ重要だと思う」「人的コストをかけられるのであれば、理想的な調整方法だと思います」という役割に対する評価と、「A看護大学のコーディネーターさんは、すごくうまくやっておられると思います」「施設側のことも情報収集されていると思います」「学生さんの配分数は適切だと思っています」という地域コーディネーターの技量に対する評価に分かれた。

5. 結論

本研究の目的である、臨地実習施設の実習調整者が考える地域コーディネーターの役割と機能に関して、以下のような示唆が得られた。

(1) 臨地実習調整者が考える地域コーディネーター

ターの役割や機能は、[実習計画のための調整][実習の学びのための調整][実習の水準確保のための役割][施設モチベーションの向上][コーディネーターと教員の関係性]に大別できた。

(2)臨地実習調整者は、地域コーディネーターが〈地元出身の強み〉を生かし、〈対面会話による心理的効果〉を最大限に活用し調整していることや、〈臨地実習施設に対するフィードバック〉機能については良い評価をしていた。

(3)臨地実習調整者は、地域コーディネーターの〈役割の不明確さ〉や〈情報伝達の不確実さ〉については具体例を提示してくれた。これにより、今後の検討課題が明確になった。

謝辞

今回の研究のために、ご協力いただきました臨地実習責任者の皆様、臨地実習調整者の皆様に深く感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省ホームページ：「看護師等の人材確保の促進に関する法律」1992年6月26日公布，
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou.../0000103786.pdf> (2020.09.07).
- 2) 文部科学省：「看護師・准看護師養成施設・入学定員年次推移一覧」2018年5月，
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2019/02/22/1314031_03.pdf (2020.09.07).
- 3) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第一次報告」2019年12月20日，
https://www.mext.go.jp/content/20200616-mxt_igaku-000003663_1.pdf (2020.09.07).
- 4) 文部科学省：「看護学教育の在り方に関する検討会報告」2014年3月，
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm (2020.09.07).
- 5) 村口孝子他「成人看護学実習における臨地実習指導者の指導行動の評価に関する研究」、『鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要』第74巻(2017)，pp. 1-11.